

**都市と山村地域の交流や連携を深める機会を増やすために
地区住民や地域で実践可能な取組や、そのために必要な方策等**

<p>地域資源を生かした交流</p>	<p>都市部主体のイベント（ふれあい祭り等）での山村地域の特産物（野菜、ジビエ等）の販売 『具体例』 野菜や山菜の詰め合わせセットを販売する際に、併せて調理法がわかるレシピを付ける</p> <p>地域資源である山を生かしたキャンプ場やアスレチックの整備、運営</p> <p>地元木材を活用したログハウスキットの製造販売</p> <p>大規模農産物等の販売場整備</p> <p>新たな特産品の発掘（炭、キノコ、山菜等）</p> <p>個人対象の貸し農地、貸し山林の拡大</p> <p>米の契約購入（年間費用を支払い契約した土地で採れた米を購入する）</p> <p>観光案内、移住相談コーナーを設けての情報発信</p>
<p>人と人の交流</p>	<p><学生を対象とした取組></p> <ul style="list-style-type: none"> ・セカンドスクールによる山村の暮らし体験（スタッフは都市部の大人も含めて構成） ・従来野外活動センターで実施しているような内容を、山村地域で実践 ・小学校同士の交流（互いに学校を行き来して合同授業を行う、虫捕りや運動会等のイベントの合同実施） <p><自治区その他団体同士の取組></p> <ul style="list-style-type: none"> ・山村部と都市部で姉妹地域のような関係を作り交流を図る ・高齢者クラブや子ども会（ジュニアクラブ）等の活動の中に交流行事を設ける ・地域内で活動をしているボランティア団体のうち、共通する活動を行っている団体同士で相互の地域で合同で活動 ・ふるさとの山を守る活動のボランティア隊を発足し、流域ごとに担当地区保全活動を実施。また、併せて家庭から川の水を汚さない事例の学習を行う ・ふれあい祭りのような地域の大きなイベントに自治区の紹介ブースを設け、交流活動や自治区の情報をPRする ・互いの地域の特産物等の「物々交換祭り」の開催 ・自治区役員やコミュニティ会議、地域会議で互いの課題についての意見交換会開催 <p><その他の取組></p> <ul style="list-style-type: none"> ・山村地域で空き家を活用した共同生活施設整備し、山村地域の生活体験や地元住民との交流を図ることが出来る場を創設

定住促進	山村地域の暮らしについて多様な情報発信を行う
	移住を考えるきっかけを与える場、相談会やイベントを開催
	生活環境の整備、福祉、教育環境を向上させる
	食材、伝統工芸、森林など地域資源で所得と雇用を確保する
	山村地区と豊田市駅を結ぶ基幹バスの充実が重要である。通学範囲が広がり、住民にとって最も大切な子どもの育成に寄与する。車を持たない住民にとっても切望されているものと思う
末野原地域における具体的な交流のアイデア	都市部においてダンボールコンポストで堆肥を作り、山村地域で農作物を栽培する。できた農産物は都市部住民が購入するといった相互関係の構築
	<p>「SSS（末野原・下山姉妹地域特別振興券）」による交流事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ①姉妹地域内で使用できる振興券の販売 ②両地区の利益に内容を検討し、負担が偏らないようにする（「おもてなし」ではなく、商業ベースで検討） ③運営は、実行委員会形式で地域住民の主体的な参加を促す（当面は交互開催） ④市の補助金制度を活用するが、プレゼント的な事業ではなく、両地域の産業や観光の良さや魅力を互いの住民が購入するという形式とする また、協賛、協力企業や商店を募ることで、購買意欲の活性化を図る

その他地域会議委員から出された意見

以下は諮問の際の意見交換会や山村地域現地見学を通じて感じたことの意見です。
今後方策等の検討にあたり、市民の声の一つとして参考にさせていただきたく掲載いたします。

1 山村条例に関すること

- ・山村条例は、「豊田市民の誓い」にある「緑をはぐくみ、川を大切にして、豊かな自然を愛しましょう。」の一節にすべて集約されるのではないか。市長も市の職員も、市民の誓いと山村条例のつながりの説明がなく違和感がある。
また、山村の価値を見出して都市と山村がお互いに交流して支え合うように努めるということも、市民の誓いの4つ目「互いに助けあい、心の輪をひろげて、あたたかい町をつくりましょう。」に繋がるのではないか。なぜ、今、このような条例を作ったのかを丁寧に説明しないと市民の理解を得るのは難しい。
- ・山村地域の住民に山村条例を聞いても知らないと言われた。山村在住者が知らないのだから都市部住民が山村の価値や必要性を理解しているとは思えない。
- ・山村条例及び山村の重要性を、大人から子どもまであらゆる世代に対して同じ言葉でわかりやすく説明する必要がある。
- ・市民に対する丁寧な説明がないまま条例を制定しても意味があるとは思えず、条例を制定することが目的になっているように感じた。そういった点で行政と市民の認識に大きな隔たりを感じた。
- ・山村の大切さを多少は理解できたつもりだが、現状は日々の仕事と生活、自宅の庭の草刈りや畑の手入れ、田んぼの管理などで精一杯であり、自分のワークライフバランスの中に山村の事を考える余裕はない。
- ・大多数の市民は生活や子育てや親の介護など、自分と家庭のことで精一杯なのではないだろうか。
- ・山村条例の定義に於いて、市内に居住する者を「市民」、山村地域に居住するものを「山村住民」とあり、区別していることに違和感を覚えた。

2 諮問に関すること

- ・諮問テーマは、この地域に暮らす人からすると関心度が低く、諮問テーマとしては難しいと感じている。山村地域の課題を正しく理解するためには、諮問から答申までの期間が短く、理解が進まない状況で答申することになるので答申したものがどのような取扱いになるのか不安もあり、この諮問自体の意義に疑問を感じる。
- ・この問題は、30代40代の若い世代が考えた方が良い方策が見つかると思う。

3 山村地域現地見学会を通して

- ・山村地域との懇談会では、基本的な違い(区費、人口、組織、近助、全員顔見知り等々)が顕著であり、都市部の自治区とは比較にならないことを痛感した。このような中でお互い共生する(Win-Win)関係を見つけるのは大変な事と感じた。
- ・山村地域の自治区では人口減少により地域の草刈り(環境美化)の人手が足りず一軒で2名以上参加している等の話を聞き、近年様々な観光施設が出来、道路も整備されつつある中でそのような問題が深刻化しているとは知らず驚いた。
- ・山村地域で多くの取組を行い、努力されていることがわかって参考になった。
- ・都市部からの移住となると高い志と余程の覚悟が必要である。

- ・都市部ではごみ出しマナーが問題となるが、山間部ではあまり問題にはなっていないようで地域差を感じた。
- ・各地区で実施している事業のPRが不足していると感じた。
- ・山村地域現地見学会へは遠足気分の安易な考えで参加したが、各見学地で学ぶ事が多くあり大変勉強になった。
- ・各訪問先での取り組みや困り事、成果、今後の見通しなど聞いて、その姿勢に感心し共鳴した。
- ・これまで見学先各施設の存在を全く知らず、山村地区の抱える問題にも関心を持つことはなかった。しかし、定住者の減少、空き家、放置農地問題、害獣問題等、多くの問題に対して向き合いさまざまな対策を立てている山村地区の方々には本当に大変であると感じた。
- ・移住者を増やす取り組みにも努力されており、都市部はもっと協力しないといけないと思った。
- ・豊田市への合併後、どの山間地域も過疎化、高齢化が進み農地は放置状態、山林の荒廃化、若者は街へ出ていく等。現地で話を聞くなかで、私の認識以上に過疎化が進んでいると感じた。
- ・移住者は、稼ぎより心地よい生活を望んでここで暮らしたいと思い、街から山村地域に移り住んでいる。モノが何でもある街と違い、大変なことはあるが昔から人とのつながりを大切にして生活していることがわかった。
- ・山村の住民は街から若い人達が来てくれるだけで喜びを感じているのだと感じた。
- ・山村地域の住民は、観光地や名所を資源にしていろいろな取り組みを考え活動されていることがわかった。
- ・山村地域でのいろいろな取り組みがあるが、空き家政策、大学生による観光資源を活用したアイデア、鳥獣による農作物の被害対策等々その地域に住まないとは分からないことばかりである。過疎化が進む中、高齢者だけではその地域を守れない。働く場所がない、山も荒廃し、自然豊かな環境が守れない。
これからは、都市と山村が一体となってその地域が安全に安心して暮らせる社会構造を作り上げる必要があると思う。
- ・都市部の地域会議委員が、良い取り組みなど気づかされた部分もあり有意義な見学会(意見交換会)であった。
- ・山村地域現地見学会では、新しい発見、問題点が良くわかったという意見が多くあったのでこういう機会を多く持つことが必要と感じた。
- ・下山地区と末野原地区との交流会があった様だが、今後も継続拡大していくことができないか。
- ・訪問した各地区での皆さんのお話から、コミュニケーションの大切さを改めて感じた。特に、つくラッセルの戸田代表の「どんな施設にするかではなく、誰とするか」、「互いをよく知り、かかわりを創り続ける」との言葉に感銘を受けた。